

モンテッソーリ教育に基づく子どもの日常生活における運動機能の分析 －幼児・児童の心と体の健康をめざして－

程野 幸美

要旨

幼稚園・保育園施設での日常生活が、子どもの成長に与える影響を保育現場での子どもの成長過程を観察し分析を行った。モンテッソーリ教育において、子どもの成長をみつめ個々の子どもへの的確な援助を行うことは、保育者の重要な役割である。著者はこのモンテッソーリの観察・分析に基づき、一人の幼児の観察分析による援助と指導を行った。結果は保育現場での日常生活行動が、子どもにとって成長・発達の重要な運動であり、併せて人格形成の土台をなすものであることが明らかにできた。

Keyword: モンテッソーリの子ども観 日常生活活動 子どもの観察分析 保護者との連携保育

1. はじめに

モンテッソーリ¹⁾は「日常生活活動と呼ばれる運動ほど子どもの全発達にとって肉体的、精神的、道徳的な面からも大切なものはない」と論じ、子どもの成長・発達に及ぼす日常生活の重要性を述べている。中でもモンテッソーリは手を洗う、食事をする、遊ぶ等あらゆる日常生活も運動と捉えるなど乳幼児の行動の観点の範囲を大きく括げ「運動」と位置づけている²⁾。

通常、幼児教育の現場では「子どもの運動」とは、マットや跳び箱、平均台等の体育用具を用いた体育活動が主であり時として砂場遊びを含むことも多い。また運動会も子どもの運動として大きな位置を占める。こうした子どもの身体活動を「運動」というカテゴリーのもとに分類されおり、幼児期の成長・発達に大きな力を発揮している。

一方モンテッソーリ教育では上述のごとく、乳幼児の日常生活活動の総てを重要な運動と捉えて乳幼児期に体得していくと提唱している。「人間の可能性を伸ばす教育である」³⁾と関はその著書の中で評価している。

本論文は著者が幼稚園教諭として経験した事例を通して、モンテッソーリの日常生活活動「運動」の観点から分析を試みた。

2 著者が経験した子どもの観察事例

事例 H 男児

a) 園における入園時の観察状況

3歳児で入園する。入園当初より言葉が未分化であり会話が出来なかった。本人の名前を呼んでも反応もなく園内中を常に一人で歩きながら、その都度何気なく耳に入った言葉を「何でしょうね？これ」と言い続けながら歩いていた。もちろん排泄も自立し

ておらず、園内中の女児の髪留めに興味を示し、園内にある全クラスの女児の髪留めを触りながら過ごしていた。また本人の祖母が一日に数回Hにとって濡れた状態の紙おむつでは、不快であろうという理由から紙おむつの交換に来園する状況が入園以来より続いていた。

b) 家庭の状況

両親共に早朝からの勤務状態が続き帰宅後は家事に追われていたために、主に祖母がHの養育に従事し日々を過ごしていたようである。またHを養育していた祖母は難聴であった。

c) Hへの観察分析とその後の取り組みについて

著者はHにおいての観察分析とその後の取り組みを述べることで、子どもの運動の根源となる乳幼児期の日常生活運動を援助・指導することの重要性を考察していく。

Hの5感覚については、Hが園内を常に一人で歩き続けながらも何気なく耳に入った「何でしょうね？これ」と、女児の髪留め触る様子からも、自分の置かれた環境に自ら手を触れ、感じたことを未分化ながらも外界から吸収した「何でしょうね？これ」という言葉に置き換え発語しながら過ごしているHの現状を分析し、著者は5感覚を通してHが自分の置かれた環境から吸収する、いわゆるモンテッソーリの「吸収精神」(後述)を活用することによりHの成長・発達が可能であると推測した。このHの状況に着目し本人の感覚の育成を目標とした。

この「吸収精神」とは、乳幼児が日常生活の中から5感覚を使って吸収する子ども特性のエネルギーであり、モンテッソーリの子ども観の中核の一つでもある。まず感覚の基礎である、快・不快は乳児期に育成される。著者はHの成長過程において「快・不快の感覚の育ち」を促すことで、紙おむつからの

自立を目指した。

そのためには、Hの祖母が入園当初より1日に数回、Hの紙おむつの交換のための来園することを見合わせる意向を両親に申し入れた。再三「Hが気持ち悪いであろう」との理由から、Hの祖母からの紙おむつの交換への申し出があった。しかし著者は、両親と話し合い両親の承諾により、紙おむつが濡れてもHが気持ち悪さを表現しない限り、紙おむつの交換を見合わせることを続行した。その際、家庭生活においても、園生活においても本人の行動の中に、不快を示す態度が見受けられた場合は、交換を行い「快」の体感が充分味わうことが出来るよう配慮し、交換の際には常にHの快の体感「気持ち良い」・「気持ちいいね」・「良い気持ちね」等の言葉掛けを繰り返し行った。

それと併せて家庭生活においても、H自身と両親が①手をつないで公園をゆっくり散歩すること②抱きしめること③語り掛けること等、0歳から4歳児までの日常生活の自然な流れの中で必要であろうと思われる生活の追体験の日々を繰り返し励行して戴くよう協同をお願いした。この状況で5歳の年長児まで積み重ねてきた。

また園においても無意識的なHの動きから、本人自身の目的意識を持った動きとなるように、本人との対応時には、可能な限り目（視線）を合わせながら本人と視点が定まることに重点を置き関わり続けた。また保護者と連携し家庭においてもこうした対応をしてもらうことに努めた。まさに「家庭生活と園生活の連携」による日常生活運動への取り組みであると同時に、保護者の全面的な協力を仰ぎながらの共同保育指導であった。

上記の日常生活行動の変革から7ヶ月後、本人自身から園内で初めて「ホ(・)ドノセンセ(・・・・)」と著者の名前を呼ばれ、H自ら著者に手を差し伸べ、繋いだHの手の感触と本人の行動に対する喜びは今も著者にとって感慨深いものがある。

その後のHの成長は目覚ましいものであった。例えば、園内で泣いている子どもの頭に手を当て、「大丈夫よ」と繰り返し語りかけるHの様子は著者の日常のHに対する言葉掛けや行為を真似た言葉と関わり方である。また年長児の特別活動の制作時には、不足している教材を、いち早く見つけ「先生、この紙ないよ」と自ら教材補充を行う等、言語面と社会面においては特に著しい成長が認められた。

まさに、モンテッソーリ教育に観る「正常化（正しい常態）への歩み」と言えるのである。また家庭生活における、保護者のHへのかかわり方の改善こそが、本人の成長への大きな要因であることはいう

までもない。H自身の持つ生まれながらの機能を、最大限に活用できるよう援助し関われた喜びは大きい。さらに家庭・保護者との密接な連携協同ができたことも正常化への歩みの大きな要因であったと分析できた。

このように子どもの日常生活を観察分析し、個々の子どもに応じた援助を行いながら、その経過を見守りやがて子どもが自己を確立して行く導きを、モンテッソーリ教育では「子どもが正常化への歩みを遂げる」というHの正常化への導きとなるのである。Hの事例は、まさにこのモンテッソーリ教育法に基づいた、著者の保育現場における観察分析による教育実践である。

3 考察

著者の幼稚園教諭勤務経験を基にした保育現場での保育経験を基に子どもの成長過程において重要であると考察される内容について以下に論じた。

a) 家庭生活と園生活の連携の重要性について

子どもの成長発達は、個々の子どもによってその成長の姿も千差万別である。また、園生活は、様々な子どもの成長段階を踏まえ健全な成長を育む重要な教育の場である。家庭生活と園生活はしばしば車の両輪に比喩される。即ち集団生活と個の生活である。必然的に一人の子どもが成長するためには家庭生活と園生活の二つの生活体験の場が必要であり、この二つの生活の場においての密接な繋がりによって子どもは成長を遂げていくのである。さらに子どもにとっての入園生活環境は大きな広がりを見せ、園生活での経験は、まさに未知の世界への第一歩となる大きな出来事でもある。より良い幼児教育を目指すためには子どもの生活基盤である家庭生活の在り方を踏まえ、園における保育活動を通して家庭と園が連携し、子どもの成長を援助することが最も大切な事柄であることを著者は自己の保育現場において観る子どもの姿を通して痛感している。

b) 子どもの日常生活の重要性について

子どもは絶えず自分の身体を動かしながら生活をしている。さらに子どもが日常生活を通して行う何気ない日常生活活動の一つひとつ（衣服の着脱・手を洗う等）が明日の子どもの成長と深く繋がっている。人間は生きていくために誰しも、朝起きてから寝るまでの日々の生活活動を自分自身で行っている。この子どもの特性の一つとして日々の生活活動における同一活動を何度も繰り返し行うという特徴的な点が挙げられる。子どもはその活動がすでに成立している活動であったとしても、また始めから取り組むことを繰り返している。このことからも子どもの

日常生活における活動の特性が理解できる。この繰り返し行うという子ども特有の「繰り返し現象」⁴⁾により、子どもは絶えず日常生活運動をしていることになる。同時に、子どもの成長を支えているもう一つの「敏感期」⁵⁾と呼ばれる子どもの感性についても記しておきたい。子どもは自ら自分の置かれた環境に関わり吸収することで生活活動を通して自己成長を遂げているが、この敏感期によって子どもの生活活動は、より充実した運動へと導かれている。モンテッソーリはいかに子どもの成長にとってこの「敏感期」における日常生活活動が大きな意味を持つ運動であるのかを述べている。

c) 子どもの5感覚の重要性について

子どもの日常生活の重要性について、考察 b)において乳幼児期における日常生活運動の必要性を論じ、子ども特有の繰り返し現象と敏感期についても記した。ここでは乳幼児の5感覚を通した子どもの成長について事例を含め少し触れておきたい。子どもはこの触覚・視覚・嗅覚・味覚・聴覚の5感覚により、絶えず自分の周りの環境から刺激を与えられまた自ら吸収しながら成長している。言い換えるなら感覚が発達せず未分化な子どもは成長途上において発達の遅れが生じることになる。

ここで著者は、モンテッソーリの子ども観に則して、保育現場で関わった子どもの観察分析報告から日常生活における5感覚が及ぼす子どもにおける心身の運動発達への影響について著者の勤務していた幼稚園でのHを含む指導事例を紹介する。

－著者の日常生活における指導事例－

保育者としての著者の体験から一例として「シール貼り」の活動について観察したい。

園生活には、毎日の登園の証として個々の子どもが自分のノートにシールを貼る活動がある。それは予めノートに印刷された既定の枠に丸いシールを貼るという作業である。特に3歳児頃の子ども達は、自分の貼ったシールがわずかでも四角い枠の中央からずれると、再びそのシールをはがして貼り直す。しかも、その貼り直したシールが、わずかでもずれていた場合は何度も貼り直し、「シール貼り」という生活活動を幾度も繰り返すのである。やがてシールに粘着力がなくなると、次のシールを取りだし、子どもは自分がその活動に納得するまで幾度も「シール貼り」という行為に取り組んでいる。そこに観る子どもの姿は、子ども特有の「わずかな違いにも敏感に反応する」敏感期にある子どもが自分の未分化な手を使い、腕を動かしながら作業を日々繰り返す中から筋肉の育成及び視覚を通して行われる協応的な成長活動を繰り返していることになる。

子どもの生活活動の一例として「シール貼り」という園生活においての日常生活活動を取り上げたが、このような子どもの日常的な活動の中にこそ運動による筋肉発達の基礎が育成されると同時にまた子どもは忍耐力、達成力等の精神的成長も遂げているのである。このように幼児期の感性の敏感な時期に動作を繰り返すことで身体的活動も、また思考能力等の育成の大きな機会・手段となっていることは上述のごとくモンテッソーリ教育の敏感期における教育の重要性にも合致している。

d) 手の重要性について

ここで子どもの全活動を支えている身体機能として「手」について記しておきたい。特に乳幼児期の子どもにとって「手」の果たす意味は大きい。それは生活行動における大人と子どもの違いを比較することで明らかになる。例えば「立つ・座る」という行動を比較してみよう。大人は日常茶飯事に自分の意志で簡単に「立つ・座る」が行える。子どもの場合は、「手」を使うことで自分の体を支え、身体機能全てを使い「立つ・座る」という行為がようやく可能となる。5歳児になれば充分大人の行動と類似した動きを習得しているが、特に乳児においては、生後7・8か月頃に迎える成長の一つである「つかまり立ち」を行う。その際の「手」の存在の重要性は大きい。同時に「つかまり立ち」を行うことは乳児期の子どもにとっては、自らの世界を広げる第一歩でありその意義は非常に大きい。

このように、子どもは園生活・家庭生活において「手」から生み出される精神活動によって成長へのたゆまぬ生活運動を日常的に繰り返しながら全身を使い活動することで、自らを磨いていく。子どもが日常生活を行うためには、常に全身を動かさなければならない。大人が簡単に行う活動を子どもは体全体を使って取り組んで行くのである。

ここで、日常的に行っている全ての行為の中から、例えばドアの開閉を一例として考えてみる。子どもは、大人のようにドアのノブに手を掛けて手首だけをひねり、難なくドアの開閉が出来るものではない。手首だけではなく、腕全体を使い、場合によっては全身を使いながらドアの開閉を行う。このように子どもの生活運動は、子ども自らが取り組む生活活動によって、子ども自身の全身体の筋肉運動を行っていることであり、まさに子どもの生活活動は筋肉運動であるといえる。

e) 園生活における生活活動

多くの園においては、あらかじめ登園後の基本的な生活活動は概ね一定に決まられており、それを毎日子ども達が同じ手順で行えるように設定している。

これは子どもが登園時から行われる園生活においての保育活動の流れや降園時に行われる身支度・集団活動としての子どもの集まり等、基本的な園生活における活動に基づいて保育計画が立てられ、保育の一日の流れが繰り返されるように設定されている。これも子どもの繰り返し活動による子ども特有の育ちにふさわしい園生活である。子どもの活動を分析すると、考察 c) で述べたように、繰り返し現象・敏感期についての分析に見られる乳幼児期の0歳から5歳児までの子ども特有の「敏感期」という成長期に支えられ、日常的に繰り返される生活活動がいかに子どもを成長・発達へと導く要因になっているかが理解できる。まさに日常生活活動は、子どもの成長の原動力であるといえる。

f) 「子どもの運動・遊び」と日常生活活動の関連性について

ここで園生活の中で行われる子どもの遊びについて取り上げてみる。園内にある子どもの遊び道具は通常固定遊具と移動遊具の2種類に大別されている。固定遊具と呼ばれているものには、すべり台・ジャングルジム・ぶらんこ・雲梯等があり、子どもが身体全体を動かす運動的な遊び遊具として主に各園が戸外に固定し設定してある。また移動遊具にはボール・縄跳び・砂場遊びのための玩具・トランプ・パズル等があり、子どもの活動全般において戸外で行う活動のみならず室内活動の様々な遊び道具があり、それらを総称し移動遊具と呼んでいる。子どもの状況に合わせて、遊具の設定や変更・移動が容易に行えるため保育者にとっては有用な教具である。固定、移動両遊具とともに個々の子どもの成長・発達への取り組みとして有効な教育的用具である。

前述 c) で考察したごとく乳幼児の日常生活活動は運動機能の育成を助長する重要な筋肉運動である。このことを踏まえ子どもの園生活においての生活活動と子どもの運動の関連性を今少し論じたい。ここで「跳び箱を跳ぶ」という子どもの運動を取り上げ、具体的な運動遊びとしての日常生活活動との関連性を考察する。

この子どもの運動遊びの活動の中で「跳び箱を跳ぶ」という運動には、様々な運動遊びに必要な子どもの身体的な動きが組み合わさっており、各園の戸外遊びへの取り組み状況にもよるが、概ね4・5歳児に用いられることが多い運動遊びである。この「跳び箱」の運動遊びをモンテッソーリ教育法の「動きの分析」^{⑥)} の理論から運動の動作を考察した場合、おまかに5項目の動きに分析することができる。①「小走りをする」②「両足をそろえて踏み板でジャンプする」③「両手の手のひら全体を跳び箱につく」④「開

脚をする」⑤「正しい姿勢で着地する」等5項目に分けることが出来る。この①から⑤までの項目の一つひとつの動作を子どもが幾度も繰り返して行い習得し、やがてこの①から⑤までの個々の動きが一連の「跳び箱を跳ぶ」という運動活動として統合されていくのである。

このようにモンテッソーリ教育は、子どもの日常生活の全てを生活運動と位置づけ、子どものなにげない日常生活活動、例えば「鼻のかみ方」「ドアの開け方」「走り方」等々、一つひとつを取り上げ、その動作を分析し上記、跳び箱で述べたように順序立て丁寧に教えることを実践する。即ち、子どもの日常生活での全活動・行動を総て、「運動」と捉え、その行動分析を行い、その行為を成長・発達の機会として指導していくところに特徴と重要性があると考えている。

4 まとめ

著者は幼稚園教諭として長年勤務し幼児教育に携わってきた。その保育指導において個々の子どもの個別性に応じたモンテッソーリ教育法の実践を通して子どもの成長と発達を促し援助してきた。本報で発達遅滞と観られるH(3歳時入園)の事例について紹介し、モンテッソーリ教育による成長・改善例を報告した。

子どもは0歳児から、その年齢に応じた成長過程の中で育成されるべき成長課題を持ちながら成長・発達を遂げている。園児Hの成長段階における3歳児(入園時)までの未分化な発達箇所を、モンテッソーリ教育法に添った園生活の中の基本的な生活活動を通して、吸収精神の刺激から快・不快の感覚を育成し排尿習慣の改善、可能な限り視線を合わせて対応すること、機会を捉えて、抱きしめ、手をつなぐ、語りかけ等を励行した。さらにシール貼り・身支度等を「日常生活運動」として、常に家庭との連携をとりながら、Hへの援助及び観察を行った。

その観察分析から導かれた、入園前である0歳児からの成長段階の中においての未発達な体験的学びの欠落部分を、園生活及び家庭生活の中においてHに繰り返し提供することにより、H自らが吸収し成長を遂げたことを明らかにした。このHの0歳児からの成長過程においてモンテッソーリ教育法に見る、5感覚の重要性・敏感期・繰り返し現象・手の重要性等を、併せて考察した。これらが子どもの成長過程において充分「日常生活運動」としてなされることにより、子どもの成長・発達の正常化への歩みの回復がなされることの重要性を、Hの観察分析により論じた。

参考・引用文献

- 1) E・Mスタンディング著, クラウス・ルーメル監修,
佐藤 幸江訳:「モンテッソーリの発見」303-316,
エンデルレ書店 (1975)
- 2) 相良敦子:「ママ、ひとりでするのを手伝ってね!
-モンテッソーリの幼児教育-」
50-64 講談社 (1985)
- 3) マリア・モンテッソーリ著, 関 晴訳:「新しい世界のための教育」, 青土社 (2018)
- 4) マリア・モンテッソーリ著, 鼓 常良訳:「幼児の秘密」139-142, 国土社 初版発行 (1968)
- 5) クラウス・ルーメル著, 佐野 正:「モンテッソーリ教育用語辞典」, 学苑社 178-182 (2006)
- 6) マリア・モンテッソーリ著, 鼓 常良訳:「子どもたちの発見」105-106, 国土社 初版発行 (1971)
- 7) 相良 敦子, 池田正純, 池田則子著:「子どもは動きながら学ぶ」, 講談社 (1990)
- 8) マリア・モンテッソーリ, P・オスワルト G・シュルツ-ベネジエ編, 平野 智美訳,:「モンテッソーリ教育学の根本思想」, エンデルレ書店 (1974)
- 9) 前之園 幸一郎著:「マリア・モンテッソーリと現代」, 学苑社 (2007)

受理 2019年6月5日

公開 2019年6月30日

<連絡先>

程野 幸美

〒536-8585 大阪市城東区古市 2-7-30

大阪信愛学院短期大学

yhodono@osaka-shinai.ac.jp